

先日、ズームでの短歌の講演会に参加しました。そこで米川千嘉子氏の言われた「視点のわたし、人間のわたし、どちらでもいいが、自分の「わたし」を流されないようにしなくてはいけない。いくら比喻をやっても、そのあとから疑問が沸き上がってくる時代のなかにいることを意識してやっていくしかない。色々な回路をもってやっていく希望を持ちたい」「私は最後まで意味を手放したくない」という言葉が胸に残っています。私は、「意味」とは作品の中の軸や意味が通るか、などだけではなく信念や心意気のこととも指すのではないか、と思います。

それを見失ったまま書いたものは、どんなに美しい言葉を使っても、何かが届きません。表現をしていくなかで、皆さんが大切にしている「意味」は何かを感じながら読ませていただきました。

**しにがみに白髪を撫でられていた**

**絹のような手の甲で、そっと**

**藤ほたる 神奈川県**

→生きている間、生きることだけを考える時期と死について考え始める時期とがある。「しにがみ」に対しての感情は置かれた環境によって違う。絹という比喻、手のひらより力の加減が難しい「手の甲」で柔らかく撫でている「しにがみ」は神聖なものにさえ感じる。死ぬべきときに死ぬのは幸せなことかもしれない。最も恐ろしいのは、死ぬべきときに死ねないことだ。終わりは何度も来ないのだから。

**どこからきたのと尋ねると**

**埃たちは一斉に喋り始めるので**

**結局分からず終い**

**風船 東京都**

「千と千尋の神隠し」のスワタリを想像してしまった。一斉に喋るのが、埃らしいというか、あまり賢くない感じが出ていてとてもかわいらしい。「それぞれが」ではなく「一斉に」ということで、個ではなく群れでひとつのような儚さがある。しかし、埃はなぜ気付くとあるのだろうか。私も知りたい。

**天国の心あたりを聞くように**

**プールの底へ触れたゆびさき**

**豊富 瑞歩 茨城県**

→青春のど真ん中のような作品。

天国といえば空を見上げるが、その青色に続いているかのようにプールの中へ視点が切り替わる。そして一面の青から、結句で作中主体の指先の白が現れ美しく締めら

れる。空から底と、空間を大きく使っているのもよい。天国はどこにでもあるのだと感  
じる。

### ぞっくりと並ぶ剥製月の雨

鎌倉まくら 宮城県

→「ぞっくり」というオノマトペは初めて聞いたが、「ぞっくり」の「ぞっ」のざらつきが剥製の異質さと大変よく馴染んでいるように感じる。

並んでいる剥製の向こうから照らしてくる月光の淡さや、月から滴っているかのように描かれた雨。剥製にわずかに残った魂も、それらに淡く照らされ濡れているのかもしれない。

### 若いころ

香水瓶の真似をして

わたしを

使い切ると告げた

翠 東京都

→作品にも書かれているように、若いころにしかできないことである。使い切ったあと空になった「わたし」はどこへ行くのかは考えない、無鉄砲で激しい愛。自分を「香水瓶」とするナルシシズムも、空になることを前提としていると刹那的で哀しい。激しい捨て身の愛から生まれた香水はどんな香りだったのだろうか。

### 耐えきれず湖で泣く

母さんが祖母を母さんと

叫んでいる

まちりこ 埼玉県

→この作者は巧い。しかし技巧を凝らした作品よりも、作者が己の裡に目を向け何かを削りながらつくったような作品により心惹かれるものがある。特に家族についての作品で感じる人が多いように思う。

母親にも母がいることを理解していても、あられもなく子供の心をさらけ出して庇護を求める親を見るのが苦しいのは、何故か。この作品は、作中主体の母親が自分の母を看取った瞬間なのかもしれない。作中主体とその母親の激しさと、湖の静けさと呼応している。

### 真夏の飛び石連休

裸足じゃ踏めない熱い石

陽炎の向こうに海はない

### 茶和鈴 東京都

いち、に、さんまの尻尾の数え歌のような連想ゲームになっていて面白い。飛び石連休があった夏、裸足では踏めないほど真夏の陽射しで焼かれた飛び石、その熱い石の上に生まれた陽炎のなかに海が見えてきた。言葉とそれによって生まれる景を楽しむ作品である。しかし「海はない」、と終わらせる唐突さに数え歌を楽しむだけでよかった幼少期とは違う、生活の生々しさが滲んでくる。

### 炎天下の入道雲が喉に詰まりそう

#### 岡田 佳子 京都府

→なるほどたしかに、真夏の入道雲は手で掴めそうだし、ものすごい弾力がありそうで美味しそうである。味や手触りなんかを描いてしまうと、いわゆる"ありがち"な夏の青春作品になってしまうのだが、身体感覚へ繋げたことでひとつ突き抜けたものとなった。